

海の 文学志



尾崎秀樹

尾崎秀樹

海の文学志

白水社

海の文学志

一九九二年八月一〇日印刷
一九九二年八月二五日発行

著者 © 尾崎 秀樹

発行者 藤原 一 晃

印刷者 山岸 真 純

発行所 株式会社 白水社

東京都千代田区神田小川町三の二四
電話 営業部 ☎(三三九)七八一一
編集部 ☎(三三九)七八二一
振替 東京 九一三三二二八
郵便番号 一〇一

著者略歴
一九二八年台北生。
台北大医専中退。
文芸家協会常務理事、ペンクラブ専務理事。
著書「ソルゲ事件」「大衆文学の歴史」他。

三秀舎印刷・松岳社製本

ISBN 4-560-04291-8

Printed in Japan

海の文学志

装幀
西のぼる

目次

第一編 南の風と北の風

開かれた海・鎖された海 11

漆胡樽の軌跡 16

遣唐使の運命 19

鑑真の風土 22

御めの雫 27

空海の風景 30

陸と海の叛逆者 36

音戸の瀬戸の感懐 39

為朝説話と『椿説弓張月』 43

元寇 47

蒙古襲来 52

第二編 水軍から遣欧使節

瀬戸内水軍と『私本太平記』 59

日本版『宝島』	62
海のロマン『ゆうれい船』	66
大殿の意志	70
『青雲の潮』	73
『沈黙』と『鉄の首枷』	78
堺衆の雄図	83
少年使節の足跡	87
第三編 南蛮船と南海雄飛	
浜田弥兵衛とノイツ長官	93
支倉の軌跡	96
常長の内面を追う	101
天竺徳兵衛の虚実	105
山田長政とその子	108
国性爺文学の展開	110

紀文成功の秘密	114
錢五の悲劇と大野弁吉	119
第四編 自由な海の商人	

『菜の花の沖』	127
---------	-----

少年嘉兵衛の夢	130
---------	-----

樽廻船の船子頭	133
---------	-----

ロシアの南下と日本の対応	137
--------------	-----

近藤重蔵との出会い	142
-----------	-----

フヴォストフの侵攻	146
-----------	-----

ロシア政府の本意	150
----------	-----

ディアナ号事件	152
---------	-----

リコルドの配慮	156
---------	-----

日露交渉の影の仕掛人	160
------------	-----

トリオのみごとき	163
----------	-----

第五編 漂民と探検と

漂流民の思想 169

『おろしや国酔夢譚』 171

五郎治のもたらしたもの 175

海を渡って 178

暗い影をもった探検家 180

万次郎の青春 187

幕末江戸への鎮魂 192

維新史の奇跡・龍馬 196

国境を越えた愛 199

唐人お吉の悲劇 204

第六編 開国と近代化

海を渡ったおけい 209

長耳国奇談 213

花のパリの万国博	218
太地の鯨捕り	223
郡司大尉の遠征	226
白瀬中尉の極地探検	230
明治の青春	232
『海軍』と『御盾』	236
『海神丸』と『ひかりごけ』	239
富江珊瑚と海難	248
『潮騒』の舞台	251
海洋歴史小説の可能性 あとがきにかえて	255

第一編 南の風と北の風

開かれた海・鎖された海

日本は四面海に囲まれている。しかもユーラシア大陸からそれほどへだたることなく、弧状に張られた形で南北につながっており、大きくは東アジア文化圏にふくまれ、文化の北漸ほくぜん、東漸とうぜんの影響を強くうけている。

海の民だといわれてきた。だが果して、日本は海洋思想を主体化し得たものかどうか。海の意識が日本人の生活文化や習俗にどのような影をおとしてきたか、興味あるところだ。

伊良湖岬いさきの遠州灘えんしゅうに面した恋路ヶ浜こいじに、島崎藤村の「椰子の実」の詩碑が建っている。

名も知らぬ遠き島より

流れ寄る椰子の実一つ

……

この詩は『落梅集』におさめられている。海辺に流れ着いた椰子の実に託して、流離の人生をうたった抒情詩であり、旅路のはるけさとその哀しみが、そこはかとなく感じられ、愛唱する人も少

なくない。

藤村は「われもまた渚を枕」とうたい、「実をとりて胸にあつれば」と述べているが、伊良湖の地に行つたことはなく、友人の柳田国男から聞いた話をもとにつくつたものだった。

柳田国男は明治二十年代の終わりごろ、からだを悪くして、渥美半島の突端にある伊良湖岬で一月ほど静養したことがあつた。海岸を散歩していると椰子の実が流れ着いているのを見かけた。とくに風の強い翌朝など、椰子の実や藻玉が多い。それは南海から海流にのつて流れてきたものであり、日本人がどこから来たかといったことをも暗示していた。

柳田国男は書いている。

日本にどこからか米を食ふ人間が渡つて来たのは事実で、またその人たちが今の米作り人種の先祖であるといふことも疑はない。しかし周囲が海の日本のことだから、どうしても舟といふものを考へてみなければならぬ。……(略)

昔日本人が黒潮にのつて南方から九州とかその南の島などへ来たとする。どうして来たか、漂流も無論あつたが、漂流では女房子供がいつしよに漂流することは考へられないから、一度はもとの故国に帰つてもう一度出直して来るといふことを考へてみなければならぬ。ところが宮古とか八重山の、沖縄の島々で南に向いてゐる方面だけに渡来者が帰つて行く話がたくさんある。これはどこから来たといふことを考へる時の一つの手がかりになるのではないかと思ふ。……(略)

さて小さな丸木舟でどうしてきたか。浦づたひに棹さかで来ることあつたらうし、潮流を利用して島に近づくとか、風の利用といふことも考へられる。もつともそれには帆布といふことも考へなければならぬ。かうして考へて来ると、どうしても入江の多い地形、すなはち太平洋岸より日本海側の方が利用しやすく、かうして南から北へと行つたのではないかと想像できる。

〔故郷七十年〕

記紀には葦船、浮宝うまたから、無目堅間小船まなしかたまのこぶね、天磐櫂樟船あめのいやくすぶね、熊野諸手船くまのもろた、天鳥船あめのとりぶね、蘿摩船かみのぶねなどの名前が出てくる。縄文時代は丸木舟が主だったのであるが、弥生中期以降ともなると、金属器が用いられるようになり、鉄器の普及とともに造船技術も進歩する。奈良県の唐古遺跡からこから出土した弥生式土器には、船首や船尾がゴンドラ型にそりあがつた丸木舟が描かれているし、宮崎県の西都原古墳出土の埴輪の舟には、舷側に柵板がつき、櫂さも見られる。船名をつけられた最初の例は、応神帝の頃伊豆でつくられた「枯野」であろう。

七世紀の初頭には遣隋使の派遣が始まり、やがて遣唐使となり、大陸からの文化が四つの島におし寄せ、中国型船の建造技術も導入される。しかし遣唐使の廃止を境に衰退し、代つて箱型の構造船が登場する。遣隋、遣唐使の時代に始まり、日宋貿易、遣明船、前期・後期の倭寇わこ、南蛮船の渡来かんご、勘合かんご、朱印船貿易とつづくが、ストレートに海に向かつて発展することにはならず、開国のあとは鎖国が繰り返され、開かれた時代と閉ざされた時代とが交互に歴史に刻まれてゆく。

日本には古くから海彦山彦の伝説がある。

二ニギノミコトに一夜妊娠を疑われたコノハナサクヤヒメは、その潔白を証し立てするためにみずから産屋へ火を放つ。その火中から誕生したのが兄のホデリノミコトと、弟のホオリノミコトだ。兄は海幸彦、弟は山幸彦の神格を備えていた。ある時、弟は兄に道具の交換を乞い、つり針を借りうけたが、獲物はなくかえってつり針を失ってしまった。兄は弟がいくら謝まっても許そうとしない。弟は海辺で泣いていた。そこへシオツチの神が現われ、マナシカツマ（小船）を造って与え海神の宮へ行く道を教える。弟は教えに従って海神の宮へ行き、そこでトヨタマヒメと会い、父神に祝福されて結婚する。三年の歳月を経たところで、夫の嘆きの理由を知ったヒメは、父神の扶けを得て失われたつり針を探し出す。そのつり針をもって戻ろうとするミコトに向かつて父神は、それを兄に手渡す時には「オボチ、ススチ、マヂチ、ウルチ」となえ後手で与えるようにいい、さらに兄が田を上手に作ったら下手へ、逆に下手へ作ったら上手へ作るように教えた。そしてシオミツタマとシオフルタマの二つの玉を授かった山幸彦はついに兄を服従させ、以後兄は弟の守護人となる。

比較神話学では、兄弟による道具の交換、道具を動物などに奪われ、他界に探しに出かけてとり返すといった話は、ひろくミクロネシア、インドネシア群島に分布しているらしく、この話を伝承する隼人族の南方的性格が判るし、海と山、湖の干満など二元論的発想については、東シナ海に面した中国浙江省に伝わる諸説との関連がいわれる。

この海彦山彦の伝説は、日本における漁民的思考と農民的思考を象徴するように思われる。日本史はこの農民的思考と漁民的思考が興亡、隆替する歴史でもある。平家は対宋貿易をやり、貿易立